

# 荒城遺跡

平成12年度箕輪町町営住宅建替事業に  
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2001年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会



調査区B区全景（東より）



B区西土坑群（東より）

## 序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い路原の里にあり、南北に連なる東西の山々とそこから流れる中小河川、そしてそれらが流れ込む天竜川によって形成された、扇状地や河岸段丘などによる複雑な地形が織りなす、水と緑の自然あふれる美しい所です。その中でも荒城遺跡の位置する長岡地籍は、沢川によって形成された扇状地で地味の良い肥沃な土地として知られ、古代から高い生産性があったものと推測できます。また、一帯には数多くの古墳が存在し、町内における古墳の半数以上が集中する、いわゆる長岡古墳群を形成しています。このように古くから歴史性豊かな場所であり、西に面する自然地形は、人々の生活に適した条件を備えていました。

本書は、町が行う町営住宅建替事業（長岡）に先だって町教育委員会が実施しました、荒城遺跡の緊急発掘調査報告書です。荒城遺跡は、これまで多くの遺物が出土する場所として知られてきましたが、昭和30年代の旧町営住宅（元は県営住宅）建設の際にかなり破壊されているのではないかと、この懸念がありました。しかし、調査の結果一部は破壊されているものの、貴重な遺跡が残っていることが判明し、学術的に町の歴史を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

内容につきましては、本書の中で詳細に記してあります。多くの皆様に広く活用され、郷土の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査の実施と本書の作成に際しましてご理解とご協力をいただきました地元長岡区の皆様をはじめ、調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 大槻 武治

## 例 言

- 1 本書は、平成12年度に実施した長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪769番地3他に所在する、荒城道跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、箕輪町役場建設課の委託を受けて、箕輪町教育委員会が行った。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。  
遺物の洗浄・注記・接合 —— 伊藤敏明、金沢 蘭、福沢幸一  
遺構図の整理・トレース —— 池上賢司  
遺物の実測・拓本・トレース — 遠藤恵実子、大串久子、中坪佳奈子、根橋とし子  
挿図作成 —— 池上賢司、遠藤恵実子、大串久子、中坪佳奈子、根橋とし子  
写真撮影・図版作成 —— 池上賢司、柴 秀毅
- 4 本書の執筆は、柴 秀毅、根橋とし子が行った。
- 5 本書の編集は、柴 秀毅、根橋とし子、池上賢司、金沢 蘭、福沢幸一が行った。
- 6 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
- 7 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。  
個人—赤松 茂、井口守夫、尾崎利行、寺平 宏、贊田 明、山口豊春  
機関—長岡区、長岡区新城常会

# 凡 例

- 1 遺構実測図は、以下の縮尺に統一した。  
住居址1:60 小竪穴1:40 集石1:40 土坑1:40 ビット1:40
- 2 遺物の実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。  
土器実測図-1:4 土器拓影図-1:3 石器実測図-1:3、2:3
- 3 土層及び土器の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。
- 4 土器実測図における土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。
- 5 遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。



- 6 出土石器観察表の重量の単位はグラム (g) で表している。
- 7 図版の出土遺物の数字は、挿図における遺物番号を表す。

# 本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

本文目次

挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査の経過（調査日誌から）	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 地形と地質	4
第2節 歴史環境	6
第Ⅲ章 調査結果	8
第1節 調査の方法と結果概要	8
第2節 遺跡の層序	11
第Ⅳ章 遺構と遺物	12
第1節 竪穴住居址	12
第2節 小竪穴	14
第3節 集石	15
第4節 土坑	16
第5節 ビット	17
第6節 遺構外出土遺物	17
第Ⅴ章 まとめ	25

図版

報告書抄録

## 挿図目次

- |              |                   |
|--------------|-------------------|
| 第1図 調査位置図    | 第9図 集石実測図         |
| 第2図 地形観察図    | 第10図 土坑実測図        |
| 第3図 周辺遺跡分布図  | 第11図 ビット実測図       |
| 第4図 調査区設定図   | 第12図 出土土器拓影図1     |
| 第5図 全体図      | 第13図 出土土器拓影図2・実測図 |
| 第6図 基本土層柱状図  | 第14図 出土土器拓影図3     |
| 第7図 1号住居址実測図 | 第15図 出土石器実測図      |
| 第8図 小竪穴実測図   |                   |

## 表目次

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 第1表 周辺遺跡一覧表 | 第3表 ビット一覧表  |
| 第2表 土坑一覧表   | 第4表 出土石器観察表 |

## 図版目次

- |                           |           |                |
|---------------------------|-----------|----------------|
| 図版1 調査前近景（東より）            | 1トレンチ土層断面 | 3トレンチ土層断面      |
| 図版2 4トレンチ土層断面             | 5トレンチ土層断面 | 4・5トレンチ全景（東より） |
| 図版3 1号住居址 小竪穴             |           |                |
| 図版4 集石 3・4・5・6・7・10・11号土坑 |           |                |
| 図版5 1号土坑 15号土坑            |           |                |
| 図版6 出土遺物1                 |           |                |
| 図版7 出土遺物2                 |           |                |
| 図版8 出土遺物3                 |           |                |

# 第I章 発掘調査の概要

## 第1節 調査に至る経過

荒城遺跡が所在する長岡区は、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地であり、土地が肥沃であるため、古くから人々の生活の舞台であった。周辺には縄文・古墳時代などの多くの遺跡地帯が広がり、「羽場の森古墳」をはじめとするいくつもの古墳が現存する。

箕輪町は、老朽化した町営住宅（長岡）建替事業を計画し、平成12・13年度に2棟の町営住宅を建設することとなった。しかし、この建設予定地を含む地域は、縄文時代の遺跡として知られる荒城遺跡の範囲内であり、これまでに多くの遺物が確認されてきた。また、中世には城館があったとされる場所でもある。開発予定地内にもこれらの時代の埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、町の開発担当部局と町教育委員会の間で協議を行い、建替事業を行う前に記録保存を目的とした発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 調査位置図 (1:25,000)

## 第2節 調査概要

- 1 遺跡名 荒城遺跡
- 2 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪769番地3他
- 3 事業期間 12年7月1日～12年9月1日(調査)  
12年9月2日～13年3月23日(整理)
- 6 事務局
- 教育長 大槻 武治
- 文化財課長 柴 登巳夫
- 係長 原 省吾
- 係員 日野 和政 柴 秀毅
- 臨時職員 柴 チエ子 中坪 恵子
- 7 調査団
- 調査団長 大槻 武治
- 調査副団長 柴 登巳夫
- 調査担当者 柴 秀毅
- 調査員 根橋とし子 福沢 幸一
- 調査参加者 伊藤 敏明 池上 賢司 泉沢徳三郎 市川 俊男  
井上 武雄 井上 隆次 大槻 茂範 大槻 泰人  
片桐 勇 金沢 蘭 倉田 千明 後藤 主計  
小松 峰人 田中 忠男 藤沢 具明 伯耆原 正  
洞口 秋人 堀 五百治 堀内 昭三 松田 貫一  
向山幸次郎 山田 武志 吉川 正剛

## 第3節 調査の経過(調査日誌から)

- 7月3日(月)～6日(木) 調査の準備を行う。
- 7月7日(金) 午後7時より長岡区新城集会所にて、町営住宅建設及び発掘調査についての説明会を行う。
- 7月10日(月) 調査区(A区)にトレンチを2本設定する。
- 7月11日(火) 調査団の結団式を行う。重機を入れ、A区に設定したトレンチの掘削を行う。  
両トレンチとも、盛土の下はテフラ層まで削平されており、そこまで旧町営住宅の基礎が入っていることが確認された。そのためA区には遺構が残っていないと判断し、2トレンチをさらに西に延長し(3トレンチ)、B区の遺構の有無についての確認を行った。その結果、3トレンチでは一部に黒色土層が確認され、遺物も多く出土したため、サブトレンチを入れて確認することとした。

- 7月12日(水) 3トレンチ内にサブトレンチを入れて遺構の確認を行う。遺構らしき箇所が確認されたため、B区は全面掘削による調査を行うこととする。
- 7月13日(木) 1・2トレンチの土層断面測量と写真撮影を行う。
- 7月14日(金) 1・2トレンチの状況写真撮影、3トレンチの土層断面写真撮影を行う。
- 7月17日(月) 3トレンチの土層断面測量を行う。
- 7月18日(火) ~26日(木) 室内作業を行う。
- 7月27日(木) A区のトレンチ(1・2トレンチ)の埋め戻し、B区の表土掘削を行う。
- 7月28日(金) B区の表土掘削を行う。
- 7月31日(月) B区の上面確認を行う。土坑を確認し、半カットを行う。寺平宏先生に調査地の土層を見ていただく。
- 8月1日(火) 土坑の半カットを行う。集石を確認し、写真撮影を行う。また、最初に黒色土を確認した箇所を1号住居址とし、土層断面測量及び写真撮影を行う。
- 8月2日(水) 土坑の半カット、1号住居址の掘り下げ、集石の測量等を行う。
- 8月3日(木) 土坑・ピットの土層断面測量、写真撮影、1号住居址の掘り下げを行う。土坑中の3つが、深さ・プランともほぼ等しいことが判明する。
- 8月7日(月) 土坑・ピットの土層断面測量、写真撮影、全カット等を行う。
- 8月8日(火) 各遺構を完掘し、写真撮影を行う。
- 8月9日(水) 各遺構の測量を行う。博物館学芸員実習生3名が作業に参加する。
- 8月10日(木) B区の全体測量を行う。
- 8月11日(金) B区の全体写真撮影を行う。
- 8月14日(月) ~17日(木) 室内整理作業を行う。
- 8月18日(金) A・B区の埋め戻しを行い、駐車場に戻すため砂利を敷く。
- 8月22日(火) 室内整理作業を行う。
- 8月23日(水) C区にトレンチ(5・6トレンチ)を設定する。設定にあたってはA区の状況を考慮し、地形的に遺構が残っている可能性のある箇所にL字状に設定する。
- 8月24日(木) 表土掘削、上面確認を行う。土坑、ピット、仮2号住居址を確認する。
- 8月25日(金) トレンチの土層断面測量、写真撮影を行う。土坑・ピットの半カット、土層断面測量等を行う。仮2号住居址は小竪穴と判断する。
- 8月28日(月) 各遺構を完掘し、測量、写真撮影を行う。C区の全体測量を行う。
- 8月29日(火) C区の全体写真撮影を行う。
- 8月31日(木) C区の埋め戻しを行う。機材の撤収を行う。
- 9月1日(金) 駐車場に戻すために砂利を敷き、すべての作業を終了する。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地形と地質

箕輪町は、東は赤石山脈西は木曾山脈に囲まれ、南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また、諏訪湖を源とし伊那盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。

天竜川の両岸は、河岸段丘と数多い扇状地とが独特の地形を作り出している。このうち天竜川左岸（東側）の竜東地域は、東方の山麓から流れる沢川によって扇状地が形成され、沢川を挟んで長岡区と南小河内区に分かれている。扇状地における地質構造はテフラ層と、その下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂層で構成されている。天竜川はその扇端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の南突端部は、段丘下との標高差約40mを測り、緩やかに傾斜する地形を呈している。段丘下には扇頂部や扇央部より地下に浸透した水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に出る湧き水が多く、扇状地を流れる小河川の水利とあわせ、豊かな水源に恵まれている。

荒城遺跡は、この扇状地（長岡区）の突端部にあり、上記のとおり恵まれた自然環境の中に存在している。

#### 引用・参考文献

- 伊那市教育委員会・上伊那地方事務所 小黒南原・伊勢並遺跡 緊急発掘調査報告書 1992.3  
松高信幸 伊那谷の造地形史 伊那谷の活断層と第四期地質 1995.3.31



上空より遺跡地を望む（調査前）



第2圖 地形觀察圖 (1:100,000)

## 第2節 歴史環境

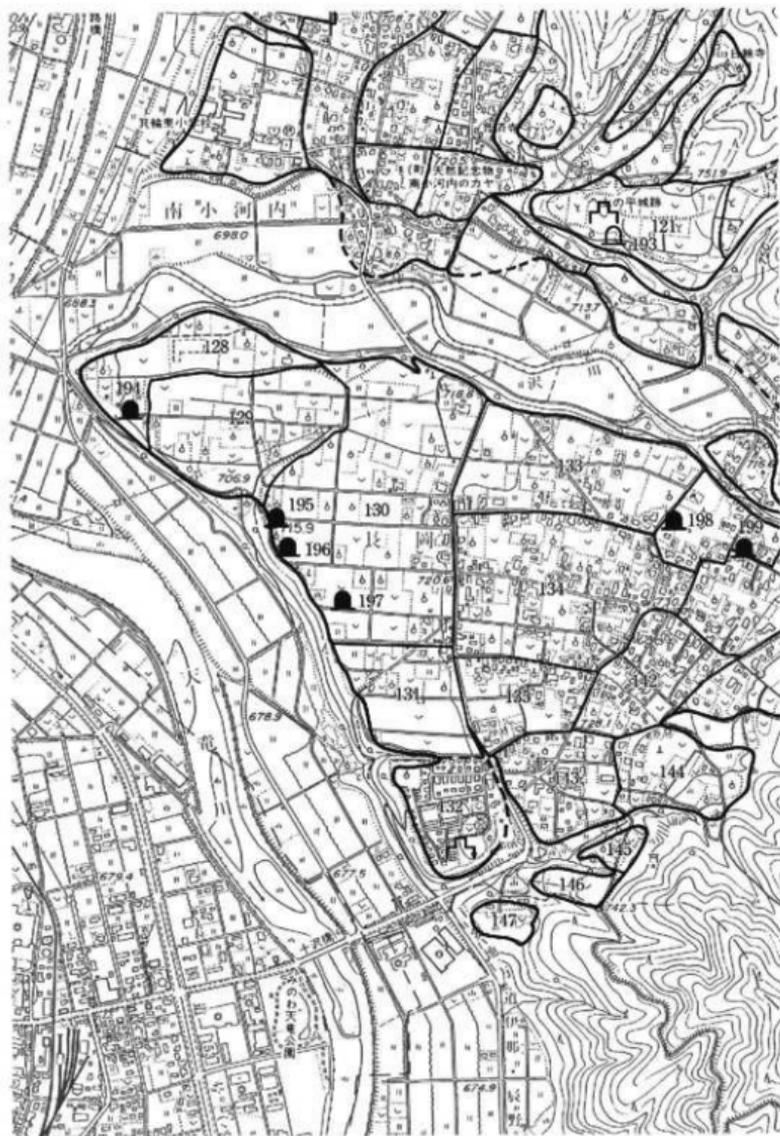
箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など水源に恵まれており、先史より人々が暮らしやすい格好の場が多い。町内には先人たちが残した足跡ともいべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯として知られている。

天竜川左岸である竜東地域（長岡区）の遺跡の分布状況は、段丘の突端（扇端）にみられる遺跡、山裾（扇頂）に広がる遺跡、その中間（扇央）に位置する遺跡とに分けられるが、荒城遺跡は段丘の突端に位置する代表的な遺跡といえる。荒城遺跡の位置する長岡区は、昔から土地が肥沃であるため、そのほとんどが人々の生活の舞台であった。また、以前は30基前後の古墳が存在していたが、現在では10基ほどが確認できるのみである。遺跡地にはかつて城館があったとされ、また、沢川を隔てた南小河内地域の舌状台地上には上ノ平城跡がある。

今後、これらの遺跡を保護していくためにも、一帯における開発には十分注意をしていく必要がある。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代					立地	地目	備考		
			旧	縄	弥	古	奈				平	中
132	荒城跡	長岡	○		○				○	段丘突端	宅地・畑	城跡含む
121	上ノ平	南小河内	○	○					○	台地	畑・荒地	城跡含む 県史跡
128	古神	長岡	○	○	○				○	扇央	畑・田	調一平2
129	春名	〃		○	○				○	段丘突端	畑・田	
130	羽場の森	〃		○	○				○	段丘突端	畑・田	
131	寺原	〃		○	○				○	段丘突端	畑	
133	直路	〃		○					○	扇央	宅地・畑	
134	馬淵口	〃		○	○				○	扇央	宅地・畑	
135	鬼戸	〃		○					○	扇央	宅地・畑	
142	澤添	〃		○					○	扇央	宅地・畑	
143	荒井	〃		○					○	扇央	宅地・畑	
144	角道	〃		○	○				○	扇央	宅地・畑	
145	藤家	〃							○	扇頂	畑	
146	高畑	〃		○					○	台地	畑	
147	戸沢	〃		○						台地	畑	
193	上ノ平	南小河内				○				台地	畑	消滅
194	古神	長岡				○				段丘突端	荒地	別称 春名古墳
195	羽場の森1号	〃				○				段丘突端	畑	町史跡
196	羽場の森2号	〃				○				段丘突端	畑	町史跡 調一平10
197	羽場の森3号	〃				○				段丘突端	畑	町史跡
198	久保畑	〃				○				扇央	畑	
199	角畑	〃				○				扇央	宅地	



第3圖 周辺遺跡分布図 (1:10,000)

### 第三章 調査結果

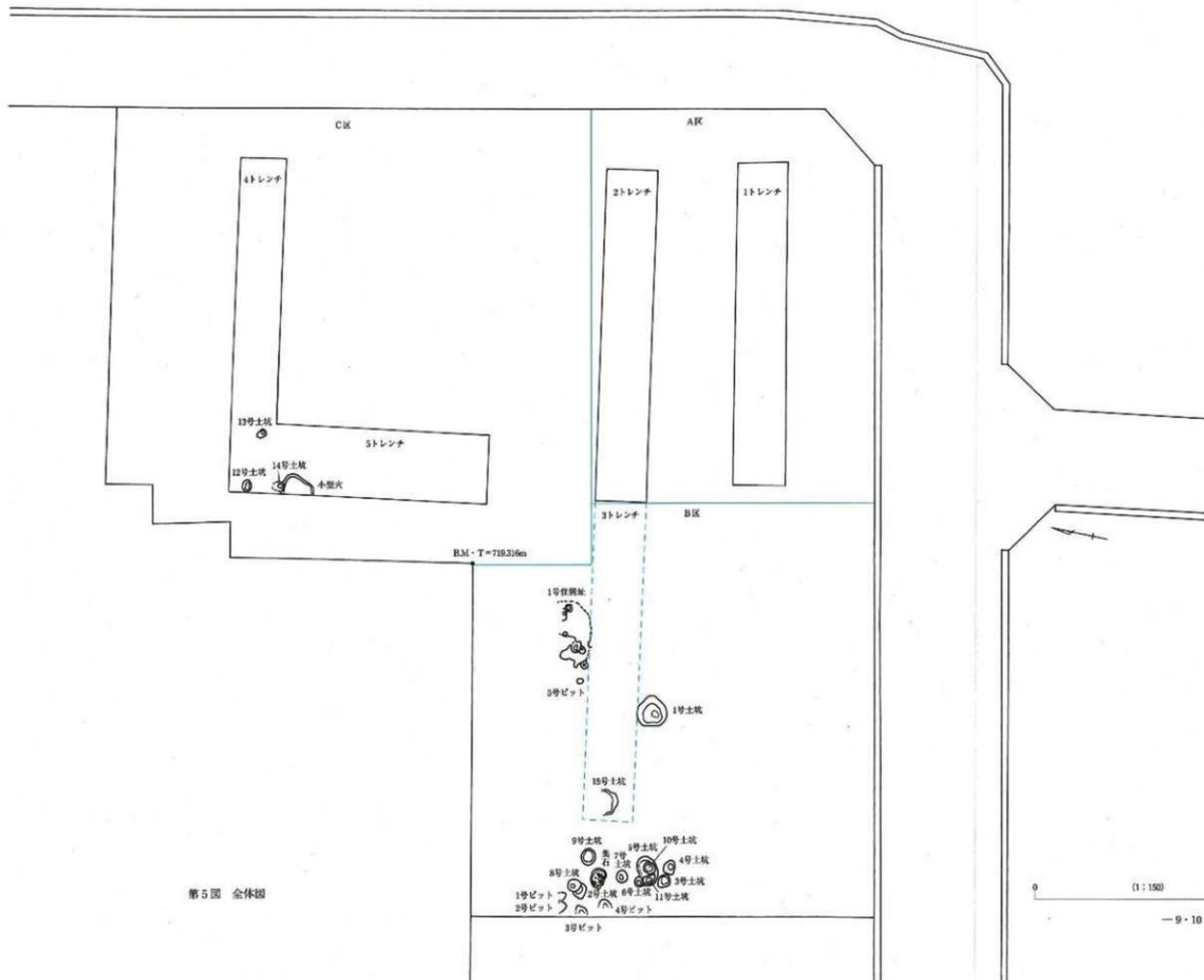
#### 第1節 調査方法と結果概要

今回の調査地は、荒城遺跡の中央やや南西に位置し、町営住宅建替予定地約880m<sup>2</sup>を対象とした。調査地は、調査実施時には町営住宅の駐車場になっており、全面を一度に調査すると駐車場が不足することから、調査地を三つに分け（A区・B区・C区）、一箇所ずつ調査をしていくこととした。

調査にあたっては、調査地は旧町営住宅造成の際に削平されている可能性があるため、それぞれの調査区においてまず試掘を行い、遺構・遺物の確認を行った。A区はトレンチを2本設定して（1・2トレンチ）遺構の有無を確認したが、テフラ層まで削平されていたため、記録をとって終了した。続くB区においてもトレンチを設定して（3トレンチ）確認したところ、二箇所において遺物をともなう黒褐色土を確認したため、調査区全面において調査を実施することとした。C区においては、A・B両区の調査の結果、北西部においてのみ遺構が残っている可能性があるかと判断し、調査区北西部にL字状にトレンチを設定して調査を行った。



第4図 調査区設定図 (1:2,500)



第5図 全体図

0 (1:150) 10m

調査の手順としては、重機による表土除去作業、手作業による遺構上面確認作業、各検出遺構の掘り、遺構の土層堆積状況・平面等の測量及び写真撮影による記録作業、遺物の取り上げ、全体測量であった。なお、基準点T(719316)をベンチマークとし、記録作業における標高を割りだした。

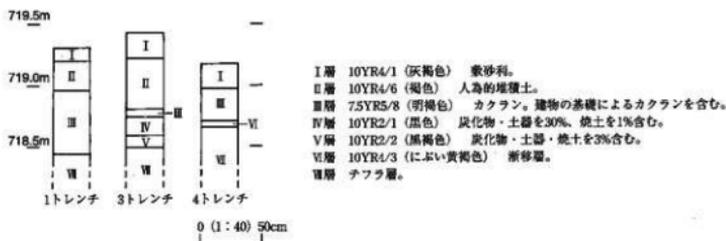
調査の結果、A区を中心とする調査地の半分以上の区域においては、旧町営住宅造成の際に破壊されていることが確認された。しかしB区を中心とする調査地北西の区域においては、縄文時代前期後葉の遺構・遺物を確認することができ、一帯は旧町営住宅建設による開発以前には、良好な遺跡が存在していたことが確認できた。なお、縄文時代以外の古墳時代及び中世の遺構・遺物は確認されなかった。

今回検出された遺構は以下のとおりである。

- |         |      |         |       |
|---------|------|---------|-------|
| ・ 竪穴住居址 | — 1軒 | ・ 土 坑   | — 15基 |
| ・ 小 竪 穴 | — 1基 | ・ ビ ッ ト | — 5基  |
| ・ 集 石   | — 1基 |         |       |

## 第2節 遺跡の層序

天竜川左岸における扇状地ならびに段丘上における地質構造は、耕作土等の黒褐色腐植土層→火山灰土層(テフラ層)→砂岩・粘板岩・花崗岩を中心とする円礫層・砂層という堆積状況が普遍的にみられる。遺構の検出は、耕作土下の自然堆積黒褐色土もしくはテフラの漸移層が一般的であるが、本調査地においては、旧町営住宅造成の際に自然堆積黒褐色土層及びテフラの漸移層がほとんど削平されているため、テフラ確認面において遺構を確認した。



第6図 基本土層柱状図

## 第IV章 遺構と遺物

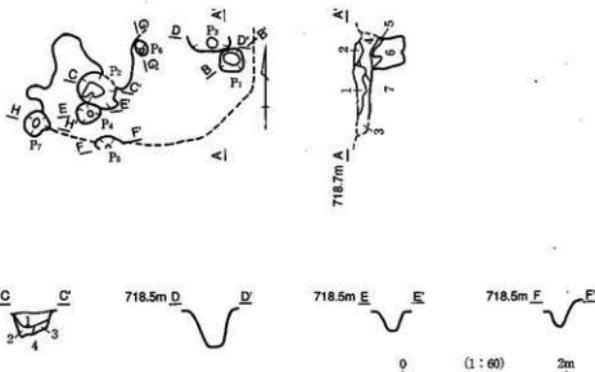
### 第1節 竪穴住居址

#### 1号住居址

**遺構** (第7図) B区の北東に位置する。旧町営住宅の基礎等で破壊されているため、壁は残っておらず床面を僅かに残しているに留まる。プランは不明、主軸は測定不可能である。

僅かに残る覆土は黒褐色であり、土器を3%含む。4層では炭化物を10%含む。床面は黄褐色土で、全体的に堅くたたき締められている。

柱穴はP1 (28×31×40cm)、P2 (50×39×26cm)、P3 (不明×53×46cm)、P4 (30×26×23cm)、P7 (33×31×22cm) 等が相当するのではないかと考えられるが、全体のプランが明確でないためわからない。炉、周溝は確認できなかった。



718.5m B B'

718.5m C C'

718.5m D D'

718.5m E E'

718.5m F F'

0 (1:60) 2m

718.5m G G'

718.5m H H'

#### 1号住居址

- 1層 75YR5/8 (明褐色) カクラン。ローム粒子を50%以上含む。
- 2層 75YR2/2 (黒褐色) 土器を3%含む。
- 3層 75YR2/1 (黒色) 75YR5/8 (明褐色) をマーブル状に含む。カクラン。ローム粒子を2%、黒色土を50%以上含む。
- 4層 75YR2/2 (黒褐色) 炭化物を10%、土器を3%含む。
- 5層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を10%、炭化物を5%含む。
- 6層 10YR4/6 (褐色) 1号住居址の柱穴と思われる。ローム粒子を30%、炭化物を3%含む。
- 7層 10YR5/6 (黄褐色) 1号住居址の床と思われる。

#### 1号住居址内2号ピット

- 1層 10YR4/2 (灰黄褐色) ローム粒子を2%、炭化物を10%、土器を1%含む。
- 2層 10YR4/3 (にがい黄褐色) ローム粒子を30%含む。
- 3層 10YR5/8 (黄褐色) ローム粒子を50%以上含む。
- 4層 10YR5/8 (黄褐色) テフラ層。

第7図 1号住居址実測図

遺物(第12図～第15図) 土器は破片のみの出土であるため器形が分からないものが多いが、何れも縄文時代前期に属するものであり、諸磯a式及びb式を中心とする前期後葉のものが多い。

1は半截竹管状工具による爪形文が施されている。本調査で確認した唯一の前期中葉有尾式土器である。

2・3は肋骨文が施されている。2は上弦肋骨文、3は木葉肋骨文で諸磯a式の土器である。

5は縄文の後、平行沈線の内側に爪形文が施されている。沈線間は4～5mmを測り、上部には赤色の顔料が付着している。6も同様に平行沈線の内側に爪形文が施されており、沈線間は4mmを測る。どちらも諸磯a式の土器と思われる。6は浅鉢の可能性が考えられ、胴部から外反気味に立ち上がる器形を呈している。

9～14は平行沈線の内側に半截竹管状工具による連続する爪形文が施された土器である。爪形の幅は7mm～10mmを測る。12・13は、爪形文に挟まれた帯状の部分(隆帯)に太い刻み目が施されており、13は平縁である。また14は爪形文の押し方が極めて雑である。いずれも破片のみであるため器形はわからないが、文様から諸磯b式のものと思われる。

22～28は地文に細い粘土紐を貼り付けて直線及び曲線を表した浮線文土器である。浮線の幅は2～3mmで、浮線上に斜めの刻み目や縄文を施したものもみられる。29も同じく浮線文であるが、浮線の上に、二本を一単位とした鋭利なヘラ状工具による矢羽状の刻み目が施されたものである。浮線の幅は3～5mmを測る。いずれも諸磯b式の土器である。

30は横位の沈線で区画された隆帯に、斜めの刻み目が施されている。器形的に諸磯a又はb式の浅鉢と思われる。

39～42は、縄文の後、平行沈線が施された土器である。地文の縄文がみえることから、諸磯b式のものと思われる。43～47は、数本からなる集合沈線文が施された土器である。縄文は確認できないため、諸磯b式後半～c式頃の可能性が考えられる。

56は無文の浅鉢と思われる。外面の無文部分に赤色の顔料が付着している。

60は浮線上を半截竹管の先端で押しつぶして連続していく、結節状浮線文が施された諸磯c式(下高式)の土器片と思われる。

61は連続した刺突文により、直線・曲線を表すものである。時期は不明である。

62は単節RL縄文が施された土器であり、口縁部には刻み目が施されている。

63は単節LR縄文が施された土器である。

75は北白川下層式Ⅱb新の土器片であり、赤色の顔料が塗られている。76～78も北白川下層式の土器である。

石器は、黒曜石の石鏃(第15図1)が1点出土している。

出土遺物は、縄文時代前期後葉諸磯式、特に諸磯b式のものが多く、本址はこれに該当するものと思われる。

## 第2節 小 豎 穴

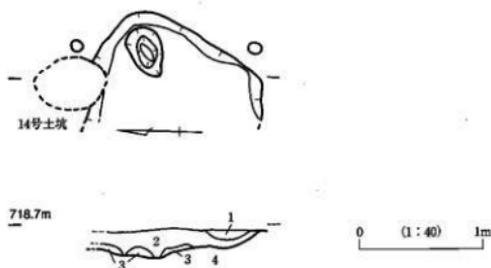
**遺 構 (第8図)** C区に位置する。約半分が調査区外に位置するため、プランの形及び径は不明。深さは24cmを測る。北は14号土坑で切られている。覆土は3層に分層されるが、全体的に締まりが強く、上からの点圧による影響と思われる。本遺構は、豎穴住居址と判断する条件に乏しく、土坑よりも大型のプラン形状を示すため、小豎穴として区分した。

**遺 物 (第12図)** 本址より出土した土器も、いずれも破片のみの出土であるため、器形が分からないものが多い。いずれも縄文時代前期後葉諸磯式の土器である。

31は地文に細い粘土紐を貼り付けた浮線文土器である。浮線には縄文が施されている。

この他に、拓本には出来なかったが、爪形文土器片が2点、沈線文土器片が3点確認されている。

出土遺物が少ないため時期の判断は難しいが、本址は縄文時代前期後葉諸磯式に該当するものと思われる。



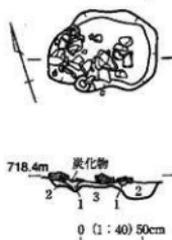
- 1層 7.5YR1.7/1 (黒色) ローム粒子を3%含む。  
 2層 7.5YR2/3 (極暗褐色) ローム粒子を10%含む。  
 3層 7.5YR4/4 (褐色) ローム粒子を50パーセント含む。漸移層。  
 4層 7.5YR5/8 (明褐色) テフラ質。

第8図 小豎穴実測図

### 第3節 集石

**遺構** (第9図) B区の北西に位置する。長径94cm、短径66cmの楕円形のプランで、最も深いところで13cmを測る竖穴に、検出面である上部より、火熱を受け赤褐色を帯びた31個の石により構成される。石は砂岩及び粘板岩を主体とする。覆土は2分層される。第1層に炭化物10%が含まれ、土器も3%含まれる。

**遺物** 土器は2点出土した。いずれも実測・拓本とも不可能な小破片であるが、1点は浅鉢の可能性も考えられる。黒曜石の石鏃も1点出土した。出土遺物が少ないため、本址の時期の特定は難しいが、遺構の状況と数少ない出土遺物から、縄文時代前期のものと考えられる。



- 1層 10YR2/2 (黒褐色) 炭化物を10%、ローム粒子を5%、土器を3%含む。
- 2層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を20%含む。
- 3層 10YR4/6 (褐色) テフラ層。

第9図 集石実測図

## 第4節 土 坑

遺 構 (第10図) 調査区から15基の土坑を検出した。位置はB区、C区共に、調査区の北西に集中して確認された。各土坑の詳細については、別表(第2表)を参照されたい。

遺 物 (第12図～第15図)

1号土坑からは2点の土器片が出土している。このうち68はLR縄文が施されている。もう1点は無文の土器である。

2号土坑出土遺物のうち、拓本をとれたものは1点(69)であり、羽状縄文が施されている。この他に、爪形文土器片が2点、浮線文土器片が2点、沈線文土器片が2点、無文土器片(浅鉢か)が2点出土している。

3号土坑出土遺物のうち、拓本をとれたものは2点である。15は平行沈線の内側に半截竹管による連続した爪形文が施された、諸磯b式の土器である。口縁は平縁で直線的に立ち上がるものと思われる。64はRL縄文が施された土器片である。この他に爪形文土器片2点が出土している。

4号土坑出土遺物のうち、拓本をとれたものは1点である。32は浮線が施された諸磯b式の土器であり、浮線上には斜めの刻み目が施されている。この他に肋骨文土器片が1点、沈線文土器片が1点、沈線による模様と隆帯に斜めの刻み目をもつ土器片が1点出土している。

5号土坑出土遺物で、拓本をとれたものは7点である。16は幅広の平行沈線内に連続した爪形文が施され、爪形文間の隆帯に刻み目が施されている。さらに爪形文で区画された区域等に円形刺突文が施され、口縁部は平縁で外反する諸磯b式の土器である。33・34は縄文の後、浮線が施された諸磯b式の土器である。48・49は、横位の平行沈線が施された土器である。縄文はみられない。65はRL縄文、70は羽状縄文が施された土器片である。この他に、16の爪形文土器と同一個体と思われる土器片数点、65の土器と同一個体と思われる土器片数点、16とは別個体と思われる爪形文土器片1点、北白川下層式土器片1点が出土している。

8号土坑出土遺物のうち、拓本をとれたものは3点である。35は縄文の後、浮線文が施されたものであり、浮線上には斜めの刻み目が施されている。波状口縁で口縁部が内湾する器形を呈している。66はRL縄文、71は羽状縄文が施されたものである。この他に、波状口縁で口縁部が内湾し、RL縄文が施された土器片1点が出土している。

9号土坑から出土した遺物は1点のみである。50は縄文の後、口縁部付近に沈線が施された土器であり、口縁は波状口縁で内湾する。諸磯b式のものと思われる。

13号土坑からは、磨耗した爪形文土器片が1点のみ出土している。

15号土坑出土遺物のうち、拓本をとれたものは6点である。8は縄文の後、竹管による円形刺突文が施されている。諸磯a式のものと思われる。51は縄文の後、平行沈線が施された土器である。59は沈線による模様が施された特殊浅鉢と考えられる。72～74は羽状縄文が施されたものである。74には沈線がみられる。この他に、沈線文土器片が2点、羽状縄文土器片が1点出土している。なお、この他の土坑からは土器は出土していない。

石器は、1号土坑から打製石斧(17)が1点出土している。また、12・15号土坑から1点ずつ黒曜石の石器(11・15)が出土しているが、いずれも種別は不明である。

## 第5節 ビット

**遺構** (第11図) 調査区から5基のビットを検出した。位置はB区の北西部において4基、1号住居址西より1基を確認した。各ビットの詳細については、別表(第3表)を参照されたい。

**遺物** (第12図～第15図)

1号ビットから出土した遺物は2点である。17は平行沈線の内側に連続する爪形文が施された、諸磯b式の土器である。52は沈線文の土器である。

2号ビット出土遺物のうち、拓本をとれたものは2点である。7は縄文の後、竹管による円形刺突文が施されたものである。諸磯a式のものと思われる。53は幅広の平行沈線が施された土器である。この他に、爪形文土器片が2点出土している。

3号ビットからはRL縄文土器片が1点出土している。

この他のビットからは、土器は出土していない。

石器は、1号ビットから1点(12)出土しているが、種別は不明である。

## 第6節 遺構外出土遺物

調査区において、主に遺構上面確認作業中に出土した、各遺構に伴わない遺物である。

4はタテ線間に横線を引き連結した肋骨文である。タテ線上には円形刺突文が施されている。諸磯a式の土器である。

18～21は縄文の後、平行沈線の内側に半截竹管による連続する爪形文が施された、諸磯b式の土器である。

36・37は高さの無い浮線の上に、二本を一単位とした鋭利なヘラ状工具による矢羽状の刻み目が施された土器である。諸磯b式のものと思われる。

38は爪形文、浮線文両方の要素を持つ土器であると考えられる。

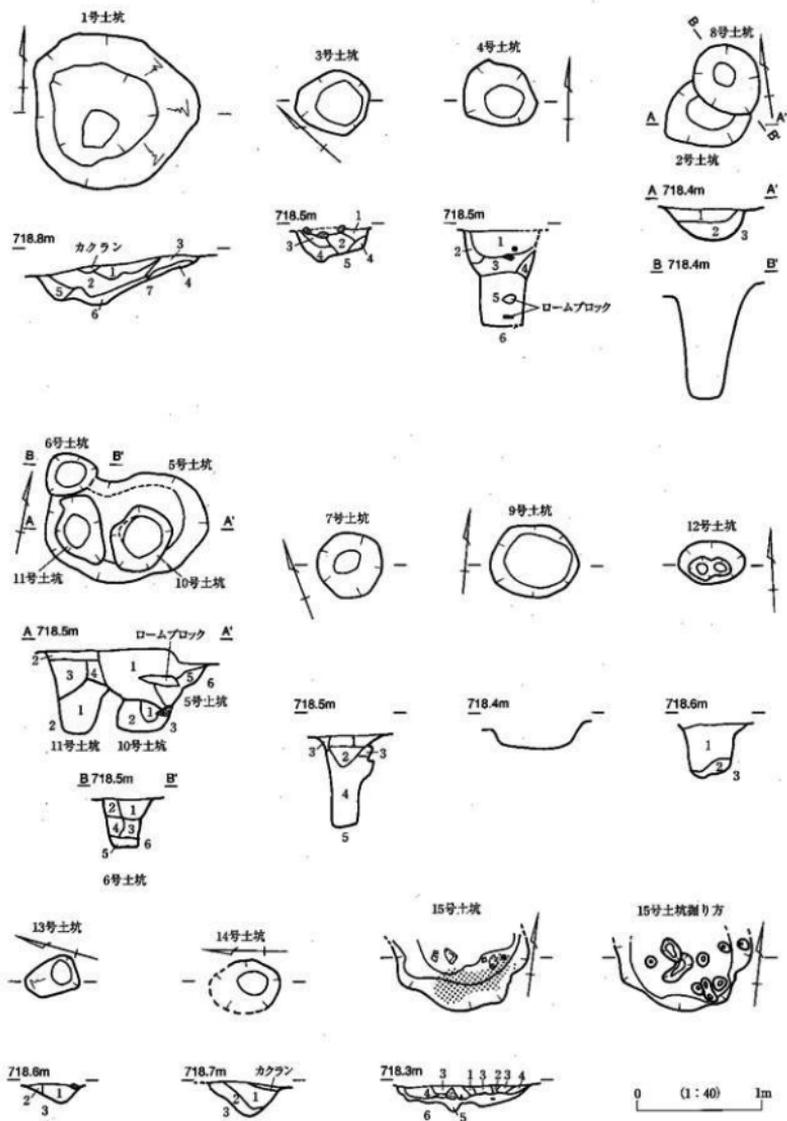
57は無文の浅鉢である。

58は口縁付近に孔があり、平行沈線の間に刻み目が施された北白川下層式の土器であり、口縁部は外反する。厚さは薄く、焼きも良い。

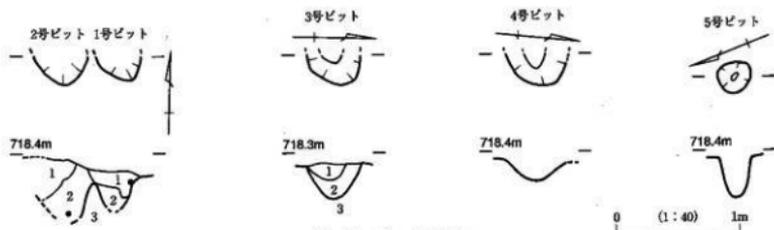
67はRL縄文が施された土器である。

79・80は北白川下層式の土器である。

石器は12点出土している。詳細については別表(第4表)を参照されたい。



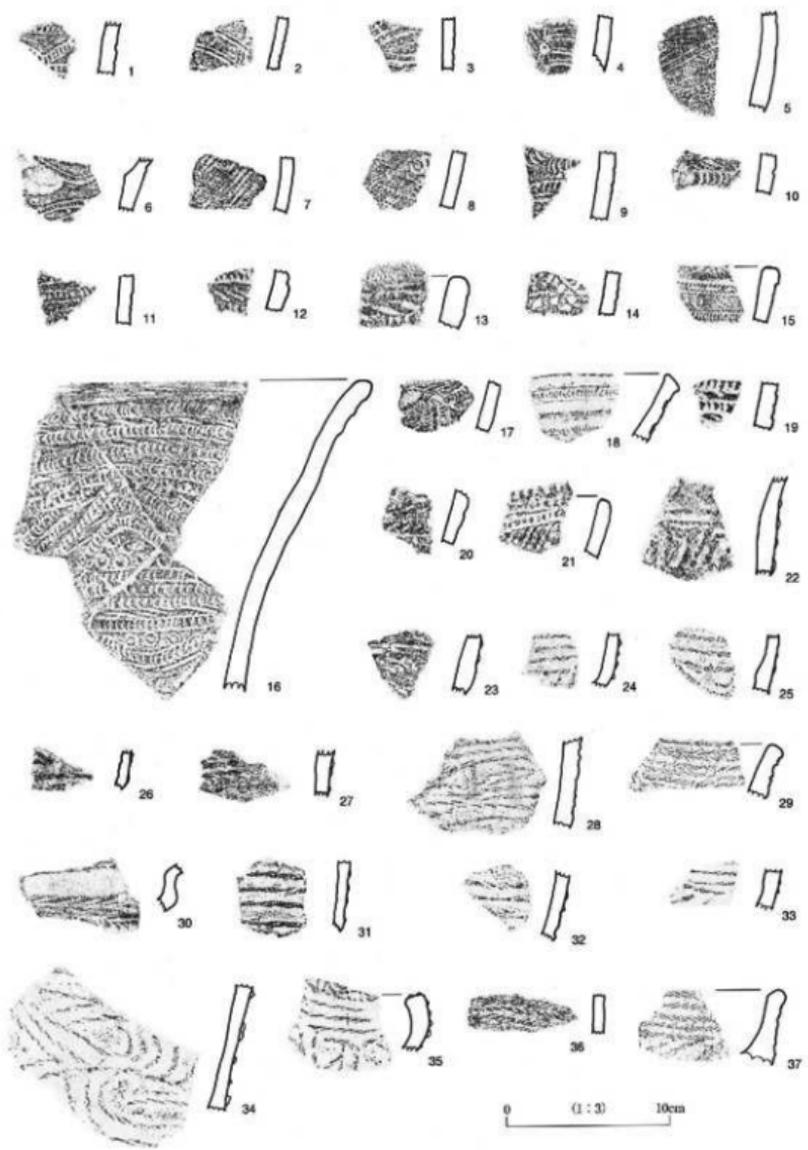
第10図 土坑実測図



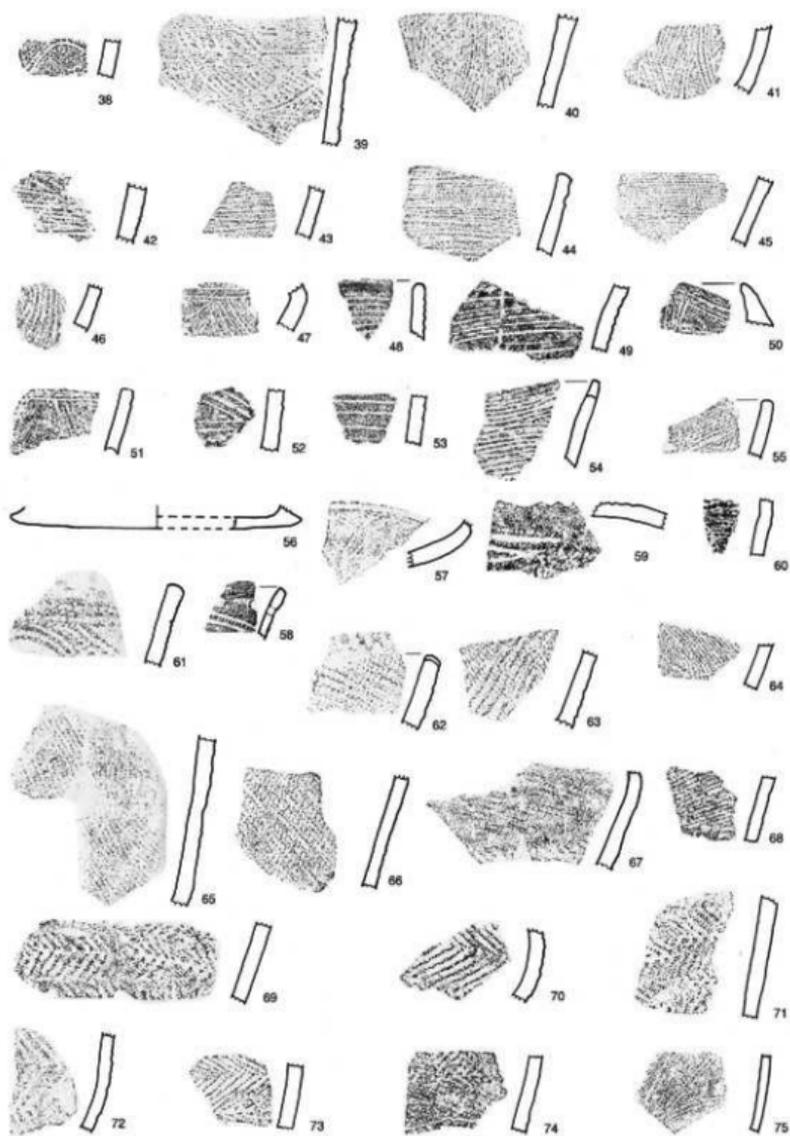
第11図 ビット実測図

第2表 土坑一覧表

No.	縦横 (cm)			平面形	断面形	覆 土		粘性	締まり	備 考
	長	短	深							
1	136	126	32	円形	二段構造	1層 75YR3/4 (暗褐色) 炭化物を3%含む。 2層 75YR2/2 (黒褐色) 炭化物と焼土を1%含む。 3層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。 4層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む。 5層 75YR2/2に10YR5/8のロームを20%ローム粒子を10%含む。 6層 10YR5/8 (黄褐色) ローム粒子を50%以上含む。 7層 テフラ層	強 中 強 強 中 中	中 中 強 強 強		
2	69	59	26	楕円形	楕円形	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を5%、炭化物を3%含む。 2層 10YR3/4 (暗褐色) ローム粒子をブロック状に20%含む。 3層 テフラ層	強 強	中 強	8号土坑と重複。	
3	63	55	25	楕円形	二段構造	1層 10YR2/1 (黒色) 炭化物を5%含む。 2層 10YR2/2 (黒褐色) 炭化物を5%含む。油断混じり。 3層 10YR2/2 (黒褐色) 炭化物を5%、ローム粒子を10%含む。油断混じり。 4層 10YR4/3 (にぶい黄褐色) ローム粒子を50%含む。 5層 テフラ層	強 強 強 強 中	強 強 中 中		
4	61	51	79	楕円形	二段構造	1層 10YR3/3 (暗褐色) 炭化物を6%、ローム粒子を3%、土器を1%含む。 2層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を50%以上含む。 3層 10YR2/2 (黒褐色) 炭化物を3%、径4cmの礫を含む。 4層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%、径0.5cm以下の小礫を10%含む。 5層 10YR3/2 (黒褐色) ローム粒子及びロームブロック20%、炭化物1%、土器1%を含む。 6層 テフラ層	強 強 中 中 中 弱	弱 強 中 中 中 中		
5	129	83		不整形	不整形	1層 10YR2/1 (黒色) 炭化物-ローム粒子を10%、土器1%、径3mm以下の礫4%を含む。 2層 10YR3/1 (黒褐色) 炭化物-ローム粒子を10%、土器1%、径3mm以下の礫4%を含む。 3層 10YR4/3 (にぶい黄褐色) ローム粒子をブロック状に20%含む。 4層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子をブロック状に30%、炭化物を5%含む。 5層 10YR4/6 (褐色) ローム粒子をブロック状に20%、径1cm以下の礫を6%含む。 6層 テフラ層	中 中 強 強 強 弱	強 強 強 強 強	6, 10, 11号土坑と重複。	
6	42		38	楕円形	二段構造	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。 2層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を20%含む。 3層 10YR3/2 (黒褐色) 炭化物を5%含む。 4層 10YR4/4 (褐色) ロームブロックを20%含む。 5層 10YR4/6 (褐色) ローム粒子を20%、径0.1以下の粗砂を10%含む。 6層 テフラ層	強 強 中 強 強	中 中 中 中	6号土坑が5号土坑を切っている。	
7	55	54	75	円形	二段構造	1層 10YR2/1 (黒色) 炭化物を3%、ローム粒子を3%含む。 2層 10YR2/1 (黒色) 炭化物を5%、ローム粒子を3%含む。 3層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を10%含む。 4層 10YR4/6 (褐色) ロームブロックを20%含む。 5層 テフラ層	強 中 強 強	中 中 中 強		
8	62	58	88	楕円形	台形				2号土坑と重複。	
9	72	63	20	楕円形	台形	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を10%、炭化物を3%含む。	強	中		
10	56	46	25	楕円形	不整形	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%、炭化物を10%含む。 2層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%、炭化物を3%、径0.5cm以下の礫4%を含む。 3層 テフラ層	弱 弱	弱 弱	10号土坑が5号土坑を切っている。	
11	61	37		不整形	不整形	1層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%、炭化物を3%、径0.5cm以下の礫4%を含む。 2層 テフラ層	中	弱	11号土坑が5号土坑を切っている。	
12	54	36	43	楕円形	楕円形	1層 75YR3/4 (暗褐色) ローム粒子を10%、炭化物を1%含む。 2層 75YR5/6 (明褐色) ローム粒子を50%以上含む。 3層 テフラ層	強 中	中 中		
13	42	30	17	楕円形	三角形	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を10%含む。 2層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む。 3層 テフラ層	強 強	中 中		
14	40	37	28	楕円形	三角形	1層 75YR7/1 (黒色) 焼土と炭化物を1%、ローム粒子を3%含む。 2層 75YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。 3層 テフラ層	強 強	中 強	小穴と重複。	
15	100		21	不整形	二段構造	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を20%含む。 2層 5YR3/6 (暗赤褐色) 焼土を20%、ローム粒子を10%含む。 3層 10YR2/1 (黒色) 炭化物を20%、土器を3%含む。 4層 10YR4/3 (にぶい黄褐色) ローム粒子を30%含む。 5層 掘り方 6層 テフラ層	強 強 強 強	強 強 強 強	炉か? 骨片も出土。	



第12圖 出土土器拓影图 1



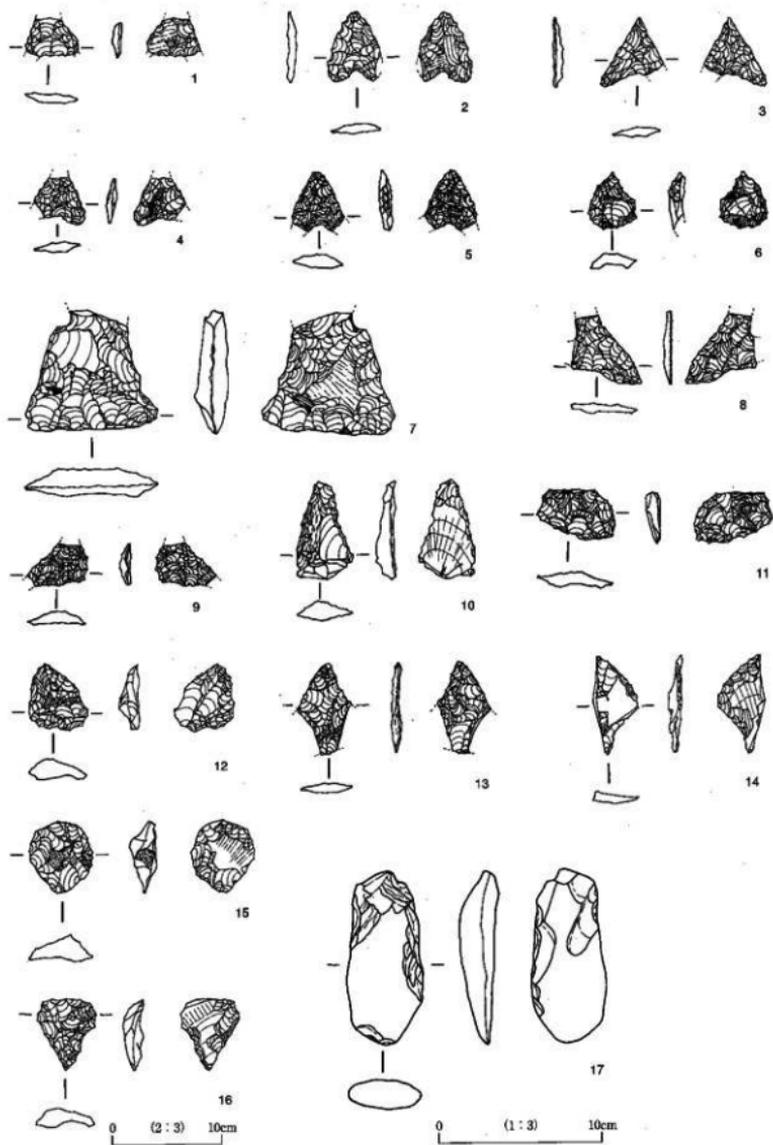
第13图 出土土器拓影图2·实测图



第14図 出土土器拓影図3

第3表 ビット一覧表

No.	規模 (cm)			平面形	断面形	土	粘性		備考
	長	短	高				粘り	締り	
1	36		30	楕円形?	楕円形	1層 25Y3/1 (黒褐色) 炭化物を極少量含む。 2層 25V2/2 (オリーブ色) ローム粒子を25%、炭化物を1%含む。 3層 テフラ層	中	中	
2	43		48	楕円形?	楕円形	1層 25Y3/1 (黒褐色) 炭化物を極少量含む。 2層 25V2/2 (オリーブ色) ローム粒子を25%、炭化物を1%含む。 3層 テフラ層	中	中	
3	45		26	楕円形?	楕円形	1層 75YR2/1 (黒色) 炭化物を1%含む。 2層 75YR2/3 (暗褐色) ローム粒子を10%、炭化物を1%含む。 3層 テフラ層	中	強	
4	50		15	楕円形?	楕円形				
5	33	31	22	楕円形	台形				



第15图 出土石器实测图

第4表 出土石器観察表

番号	種別	石質	長さ	幅	厚さ	重量	出土遺構	備考
1	石鏃	黒曜石	1.1	1.6	0.3	0.5	1号住居址	平基無茎石鏃、先端部欠損、右側刃部は背面からの加工のみ
2	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.3	0.8	遺構外	凹基無茎石鏃、基部欠損
3	石鏃	黒曜石	2.1	2.1	0.3	0.7	遺構外	凹基無茎石鏃、基部欠損
4	石鏃	黒曜石	1.4	1.7	0.3	0.5	遺構外	凹基無茎石鏃、基部・先端部欠損
5	石鏃	チャート	1.6	1.6	0.4	1.2	遺構外	凹基無茎石鏃、基部欠損
6	石鏃	チャート	1.7	1.4	0.3	1.2	遺構外	平基無茎石鏃、基部欠損、右側が反った器形
7	石匙	黒曜石	3.7	4.0	0.9	11.6	遺構外	基部欠損、左側に基部のえぐり
8	石匙	黒曜石	2.1	2.0	0.3	1.1	遺構外	基部・刃部欠損
9	石匙?	黒曜石	1.3	1.7	0.4	0.7	遺構外	基部・刃部欠損
10	剥片石器	黒曜石	3.0	1.6	0.6	2.2	遺構外	欠損あり、ナイフ型石器
11	不明	黒曜石	1.5	2.3	0.4	1.4	12号土坑	欠損あり
12	不明	黒曜石	2.0	1.8	0.6	1.5	1号ピット	欠損あり
13	石鏃?	黒曜石	2.8	1.6	0.3	1.1	遺構外	基部欠損
14	剥片石器	黒曜石	3.0	1.4	0.3	1.1	遺構外	基部欠損、ナイフ型か?
15	不明	黒曜石	2.2	1.9	0.8	2.4	15号土坑	欠損あり、剥片を加工したもの
16	不明	黒曜石	2.2	1.8	0.6	1.4	遺構外	剥片を加工したもの
17	打製石斧	粘板岩	17.0	4.6	2.1	140.0	1号土坑	刃部の調整はあまりみられない

## 第V章 まとめ

箕輪町長岡地区は、良好な地形や自然条件に恵まれ古くから人々の生活の舞台であったことが知られている。特に今回調査を行った荒城遺跡周辺では、これまでに多くの遺物が確認されており、縄文時代、古墳時代、及び中世の複合遺跡として知られてきた。しかし、遺跡周辺においてはこれまで本格的な発掘調査は行われず、昭和30年代に町営住宅及び県営住宅（今はすべて町営住宅）が建設された際にも調査は行われなかったため、遺跡の詳細は分からないままであった。今回、老朽化した町営住宅の建替事業にあたり、初めて荒城遺跡の調査を実施することができた。しかし、何分にも不勉強なため十分な調査ができたとは言えず、本報告の編集についても不十分さは了承されたい。

調査の結果、調査地の半分以上の区域においては、旧町営住宅建設の際のものと思われる造成により遺跡がすでに破壊されていたものの、残りの区域においては、住居址をはじめとするいくつかの遺構や遺物を確認することができた。住居址は1軒のみの確認であり、遺構の残りが極めて悪いため詳細については分からないことが多い。出土遺物については、土器のうち拓本をとることが出来たものは80点であり、中でも諸磯b式の土器が最も多い。諸磯a式、b式、c式とそれに伴うと思われる縄文土器、さらに同じころ関西方面から流入したと思われる北白川下層式の土器も含めると、出土土器のほとんどを縄文時代前期後葉の土器が占め、それ以外の時期の遺物がほとんど無いことはまことに特筆すべきことである。このため本調査地においては、縄文時代前期中葉の遺物がわずかに認められ（有尾式土器1点）、その後縄文時代前期後葉において、集落の痕跡が認められる（ただしその間の継続・断絶等については不明）。特にその中でも諸磯b式の遺物の出土量が多く、今回確認した遺構の多くはこの時期に該当するのではないかと考えられる。

集落の規模やその状況等については、調査面積が僅かなうえ遺構の破壊状況が激しいため、不明な点ばかりであるが、カクランの中からも多くの土器片や黒曜石が確認されたことから、一帯は旧町営住宅建設以前には、良好な遺構が残っていたものと思われる。特に黒曜石の出土は、実測した14点以外にも、小破片の出土量が極めて多い。そのため、それを証拠付ける明確な遺構が確認できたわけではないのであくまでも推定に過ぎないが、黒曜石を多く入手し加工する、ある程度力のある集落が存在していた可能性が考えられる。

いずれにしても今回出土した縄文時代前期後葉の遺物は、これまで箕輪町内ではあまり確認されていなかったものであり、この時期の地域の様子を知る上で貴重な成果を得ることができた。特に縄文時代前期後葉の純粋な資料の提供は、当地の縄文時代前期の文化研究に一助となれば、大きな成果であったといえよう。今後多くの研究者のご教示をいただければ幸いである。

なお末筆にあたり、本事業に多大なご理解とご協力をいただいた地元長岡区の皆様、調査にあたり多大なるご指導をいただいた先生方、そして直接調査にご尽力いただいた調査関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

参考文献・引用文献（著者名50音順）

- |             |  |
|-------------|--|
| 赤塩 仁        | 1996 「諸磯 b・c 土器の変遷過程」【長野県の考古学】                       |
| 伊那市史編纂委員会   | 1984 伊那市史 歴史編  |
| 今村啓爾        | 1981 「施工順序からみた諸磯式土器の変遷」【考古学研究27-4】                   |
| 白石浩之        | 1983 「諸磯 b 式土器の形式細分とその問題点」【人間・遺物・遺跡—我が考古学論集】         |
| 鈴木敏昭        | 1980 「諸磯 b 式土器の構造とその変遷（再考）」【土曜考古2号】                  |
| 谷口康浩        | 1989 「諸磯式土器様式」【縄文土器大観1】 小学館                          |
| 長野県教育委員会    | 1982 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」原村その5                    |
| 長野県史刊行会     | 1988 長野県史 考古資料編 全1巻（3） 遺構・遺物                         |
| 中村龍雄        | 1985 「中部高地 縄文土器文様（完）」                                |
| 松田光太郎       | 1992 「浮島式土器の成立について～東関東における縄文時代前期後半の土器文様の伝統～」【古代第93号】 |
| 松田光太郎       | 1993 「諸磯 a 式土器の文様とその変遷」【古代文化6月号】                     |
| 箕輪町教育委員会    | 1990 「丸山遺跡」  |
| 箕輪町教育委員会    | 1991 「古神遺跡」  |
| 箕輪町教育委員会    | 1992 「郷沢遺跡」  |
| 箕輪町教育委員会    | 1998 「仲町遺跡」  |
| 箕輪町教育委員会    | 2000 「本城遺跡」  |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編                                    |
| 牟礼村教育委員会    | 1978 「丸山遺跡」  |

# 圖 版



調査前近景  
(東より)



1トレンチ  
土層断面



3トレンチ  
土層断面

4トレンチ  
土層断面



5トレンチ  
土層断面

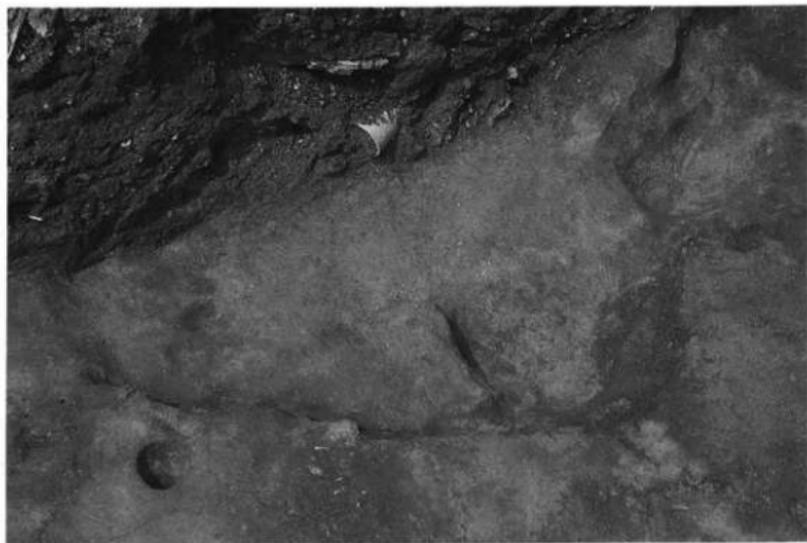


4・5トレンチ  
全景 (東より)





1号住居址



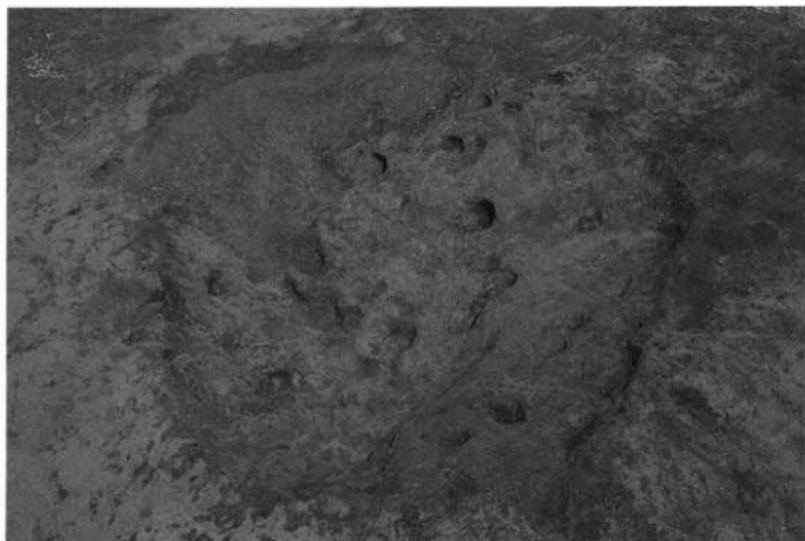
小聚穴



集石



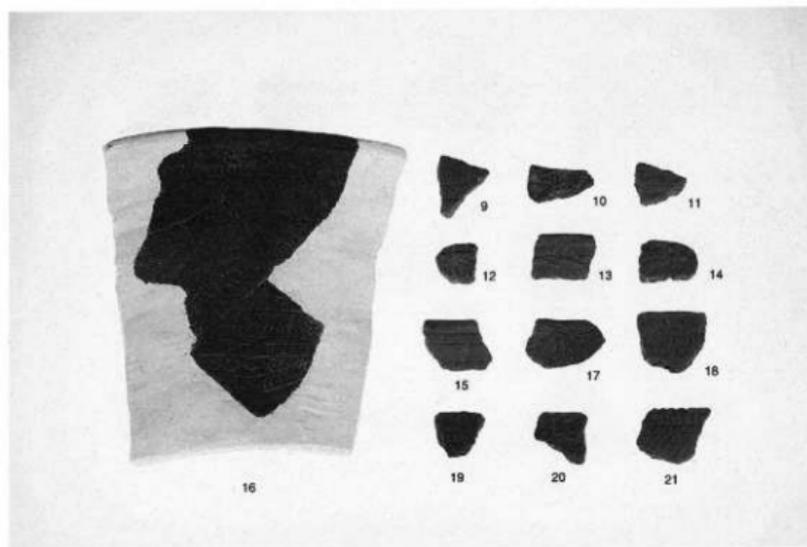
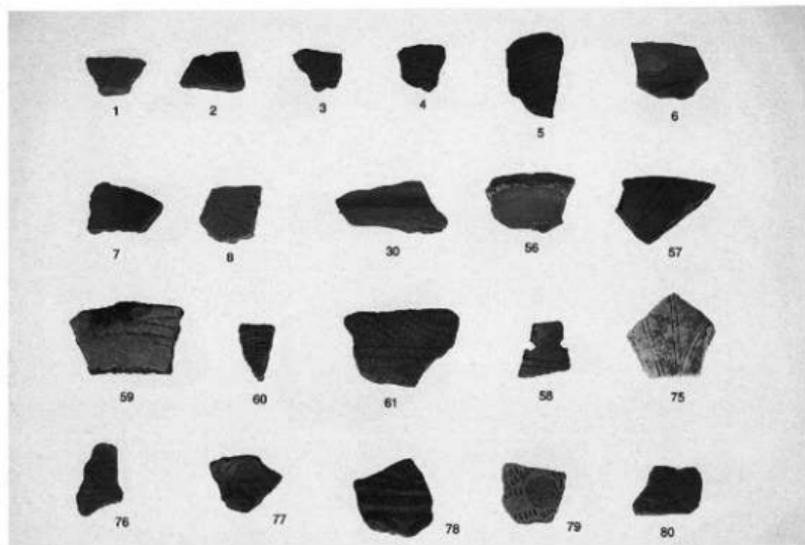
3·4·5·6·7·10·11号土坑



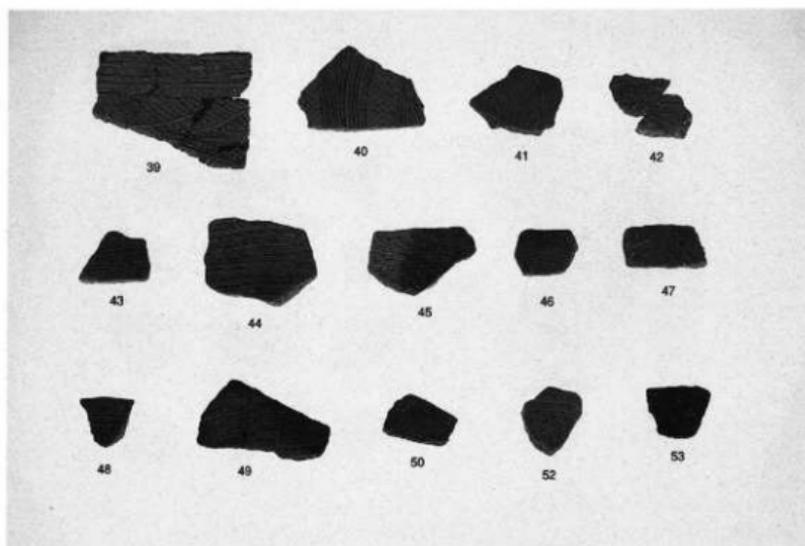
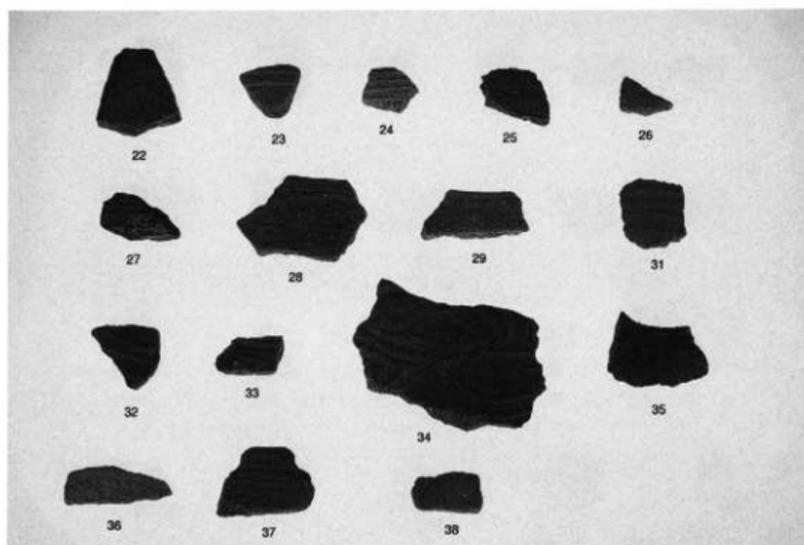
1号土坑



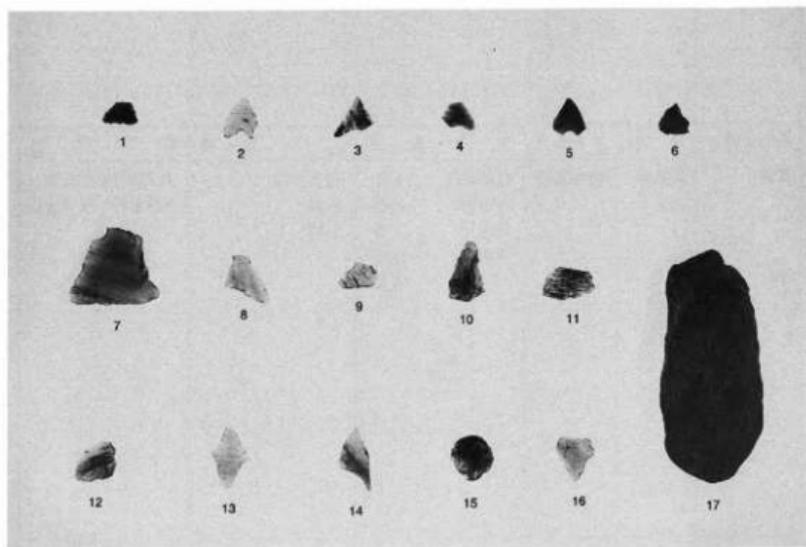
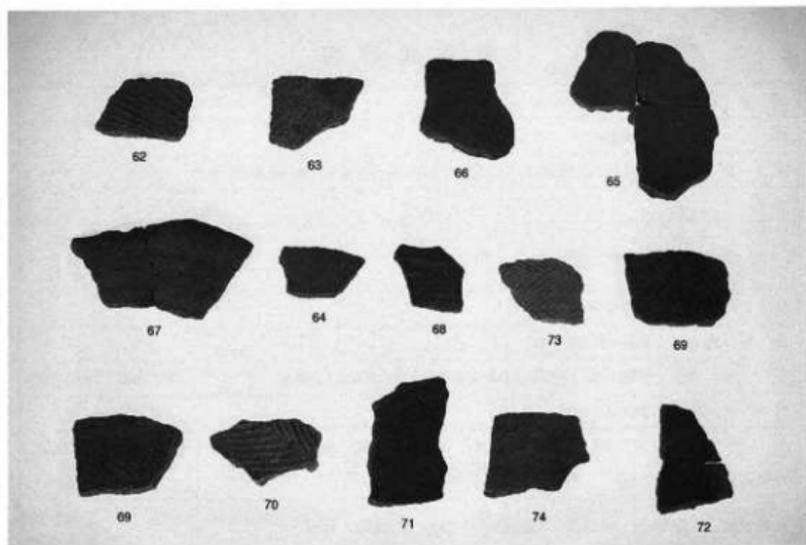
15号土坑



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3

## 報告書抄録

ふりがな	あらじょういせき							
書名	荒城遺跡							
副書名	平成12年度箕輪町町営住宅建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柴 秀敏・根橋とし子							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地							TEL 0265-79-3111(代)
発行年月日	2001年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あらじょういせき 荒城遺跡	ながのけんかみい なごん 長野県上伊那郡 みのむらおれおあぢ 箕輪町大字 ひがしみのむ ほんち 東箕輪769番地3	20383	132	35° 55' 20"	137° 59' 50"	2000.07.01 ～ 2000.09.01	880㎡	箕輪町町 営住宅建 替事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
荒城	集落跡	縄文前期	住居址 小竪穴 集石 土坑 ピット	1軒 1基 1基 15基 5基	縄文土器 石鏃 石匙		縄文時代前期後葉の 集落跡の一端を確認 した。	

## 荒城遺跡

平成12年度箕輪町町営住宅建替事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年3月21日 印刷

平成13年3月21日 発行

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会  
〒399-4601  
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10291番地  
TEL 0265-79-3111 FAX 0265-79-6368

印刷所 株式会社小松総合印刷  
〒396-0111 長野県伊那市大字英舞10243-4  
TEL 0265-72-3129 FAX 0265-73-6650